

- 1 派遣期日 令和元年11月9日(土)
- 2 研修先 学校名 筑波大学附属中学校
現在地 〒112-0012 東京都文京区大塚1-9-1
<http://www.high-s.tsukuba.ac.jp/jhs/>

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取り組み

研究主題：保健学習での技能を考える—心肺蘇生法の中での技能を中心に—

令和3年4月より、中学校において新学習指導要領が完全実施となる。筑波大学附属中学校保健体育科では、「変えるべきもの」と「変えずに守っていくもの」の試行、検討を続けてきた。

新学習指導要領では、保健分野において、目標の中に「基本的な技能を身に付ける」ということが明示された。具体的に、心の健康について「ストレスの対処をすること」や傷害防止について「応急手当をすること」や「心肺蘇生法などを行うこと」が技能の内容として示された。

附属中では、上述の技能は、保健学習の中で、単に知識の伝達及び理解という学習段階にとどまらず、さらに実践的、体験的に学ぶ意味のある内容としてとらえられ、理解と技能が伴うことにより、実践的な知識に昇華されると考えた。

① 心肺蘇生法を学習する意義について

附属中では、たとえ事故が起きなくても、心肺蘇生法を保健学習の一つとして、しっかりと位置づけ、誰もが人を救う知識と技能、そして当事者意識をもてるようになることが、今、心肺蘇生法を学習する意義であると考えている。附属中では、具体的な一例として、埼玉県さいたま市では、学校現場で起きた事故から「ASUKAモデル」を作成し、市内の全小中学校にて心肺蘇生法の授業を行っていることを紹介した。

② 授業づくりの経緯

ア 教材の検討

附属中では、心肺蘇生法の学習の中で、中心となる技能を胸骨圧迫ととらえた。胸骨圧迫の練習のために、日常の授業の中で練習用人形を人数に応じた必要数を確保することは難しいため、低予算で胸骨圧迫の練習ができるような学校用教材を検討した。

(ア) 心肺蘇生トレーニングツール「あっぱくんライト」

価格は2,000円前後で販売されているが、2～3人に1つ教具を用意することを考えるとそれなりの金額がかかる。(日立市では貸出用60個を確保している)。

(イ) ペットボトル(CPRトレーニングボトルプロジェクト)

ペットボトルは比較的手に入れやすく、生徒が各自準備することもできる。学校現場でも容易に実技授業を実施できると附属中は考え、今回の実践で採用した。ただし、精密測定結果や現職の医師からの証言によると、どのペットボトルでも良いわけではなく、サントリーが発売している南アルプスの天然水のボトル限定となる。これは、この商品のボトルの材質が他のペットボトルとは異なり、若干薄い素材でできており、空にしてふたを閉めた状態でボトルを横から押した際に、その押した感触、必要な強さが、実際の胸骨圧迫とかなり似通っているという。今回使用したものは550mlのボトルである。



心肺蘇生トレーニングツール
「あっぱくんライト」



サントリー「南アルプスの天然水」550ml

イ 評価の方法

附属中における技能の評価方法は、グループでチェックリストを使用し、互いに観察を用いた技能評価としていた。

③ 筑波大学附属中学校の保健学習について

各学年で保健学習を行っているが、特に2年生段階を中核に据え、通年1時間の保健学習を位置付けている。体育実技や、体育理論と絡めながら保健学習についても行っており、特に体づくり運動（トレーニング単元）においては、座学による理論と実技の融合を意図した取り組みを続けている。今回の「傷害の防止（心肺蘇生法）」の単元では、筑波大学附属中学校で初めて実技を評価に取り入れた授業となる。

(2) 視察校における授業の実際

第2学年 保健分野 傷害の防止 応急手当の意義と実際③（心肺蘇生法の実技）

心肺蘇生法（胸骨圧迫）の技能を中心とした授業

前回までに学習した救急車の到着時間とドリンカーの救命曲線から早急な対応が必要なこと、AEDの効果、救急処置の全体の手順についてICTを活用してテンポよく振り返りを行っていた。胸骨圧迫については、「強く、速く、絶え間なく」をキーワードとして、強さは胸骨が5cm以上6cm以下の間まで沈む程度に押すように指示があった。また、速さはドラえもののテーマ、どんぐりコロコロ、地上の星など、生徒になじみがありリズムをとりやすいものを例として取り上げることで、技能習得の助けにつながる工夫も見られた。振り返りの後、4人で1グループをつくり、①実際に救命処置を行う人、②ペットボトルを押さえる人、③119番とAEDの依頼をされる人、④チェックリストを記入する人で実習を行っていた。場の工夫としては、机に胸骨周辺の絵を設置し、意識の確認の際、肩を叩けるようにしていた。実技の流れは、①傷病者の発見、②周囲の安全確保、③意識の確認、④応援要請と119番・AED依頼、⑤呼吸の確認、⑥胸骨圧迫、⑦AEDの到着と装着までとなっていた。

各グループとも意欲的に取り組む姿がすばらしかった。実技者と記録者で振り返りを行う時間を確保することで、学んだ知識が技能としてどの程度発揮されているか確認することができていた。また、改善点を話し合うことでさらなる技能の向上につながると考えられる。相互評価を取り入れており非常に参考になった。技能を高めるためには、継続的な取り組みが必要であると考えられるが、どの場面で設定するかという課題も残った。

4 感想

準備された教材、教具はとても工夫され生徒の興味・関心を大いに高めるものであった。考え抜かれた単元計画であり、知識の詰め込みにならず、技能を身につけ、評価する段階へと生徒の学びを深めることにつながっていた。今回の研究協議会に参加したことで、新学習指導要領に記される、「保健学習の技能をどのように身につけさせ、どのように評価するか。」という内容の具体的な例を学ぶ機会となった。

相互評価を行うことで、技能の高まりや知識の定着について各自が確認することができていたので、今後の授業づくりに積極的に取り入れていきたい。また、評価後の話し合いでは、胸骨圧迫のキーワードである「強く、速く、絶え間なく」を用いた助言、姿勢についての助言などを聞くことができた。主体的で、対話的な学習につながっていたと考えられる。

授業後の研究協議では、心肺蘇生法を学習する意義はあるが、実際に救命処置をして命を救うところを目指すのではなく、自分にも命を救える知識や技能があるという自信や勇気をもたせることが目標となるのではないかと議論する場面もあった。日頃の授業づくりでも、教科内外問わず、相互授業参観等を行い、授業の振り返り等の議論する機会を設けることでより良い授業づくりにつながると考えることができた。

日立市では、中学校1年生を対象として、普通救命講習を行っている。応急手当の大切さを知るとともに救命技術を習得し、教育の視点から命の大切さを学ぶことを目的とした事業である。この事業とともに、保健体育の保健学習において、知識を習得するだけでなく実践的な技能を身に付けることにつながる授業づくりを目指したい。